

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 木村朗子

本論文「母、女、稚児の物語史—古代・中世の性の配置」は、平安時代末から鎌倉時代にかけて、母、女、稚児といった、歴史の表舞台にあらわれにくい在り方を中心に取り上げ、セクシュアリティがどのように配備されているのかを検討する。母、女、稚児は、律令に定められた婚姻といったような法制度と異なり、人々の暮らしの中に構築されるイメージの集積としてあらわれる、性をめぐる差異化のシステムを指している。

第一章は、『とりかへばや物語』、『夜の寝覚』物語をめぐって、基本的な問題構成の見取り図を示す。主人の男と性関係にある、召人（めしゅうど）とされる女房の位置をずらしてゆくと、稚児やホモセクシュアルを見いだす、というような構図である。召人はまた乳母（めのと）と大きく重なるけれども、その職掌というよりは、いわば乳母という存在に反射させるようにして母、女、稚児の構成を見てゆくという方法を提示する。

第二章では、男性ホモセクシュアル関係が明示的に描かれる鎌倉時代の『石清水（いわしみず）物語』を中心に据える。『狭衣物語』の表現と対比させて、『石清水物語』のえがく密通や兄妹婚の禁忌（タブー）を検討したうえで、ホモセクシュアル関係が異性愛（ヘテロセクシュアル）に対して、移行可能な隣接関係に置かれることを示し、隣接関係を架橋する者として召人の存在があるという点を明らかにしてゆく。さらに『石清水物語』では、物語の大きな流れを八幡信仰に託していて、こうした信仰をめぐるモチーフが第三章以降に検討する物語群への橋渡しになってゆくとする。

第三章では、いくつもの宮廷物語から往生伝のモチーフと結びあう悲恋遁世譚の流れを押さえたうえで、物語にくり返しあらわれる天人降下が往生の文脈と結びついてゆくさまについて『狭衣物語』を素材にして示し、ついで弥勒信仰および兜率天をめぐる想像力に触れてゆく。兜率天は女性の往生をめぐって浮上してきた問題として重要で、鎌倉物語の『我身にたどる姫君』は、兜率天往生をてことして女帝を誕生させ、それによって従来の龍女成仏という隘路が乗り越えられる新しさを、像的記憶というキーワードによりつつ確認する。

第四章では、『曾我物語』『将門記』『平家物語』を視野に、軍記物語における武士の表象を力士像などの彫刻的表現とかがかわらせて男性愛の問題に結びあわせること、また女帝の問題にかかわって『曾我物語』で北条政子がなぞらえられる神功皇后について

八幡神像からどういうことが考えられるかなど、広く身体性と物語のモチーフとのあいだの連関を論じる。

第五章においては、日記あるいは物語とされる、二条（作者）の『とはずがたり』が、宮廷物語の最後に行き着いた場所として象徴的に置かれているとする。後半部で出家した作者が諸国を遍歴し寺社を巡礼することで獲得する、各地の説話群や信仰のいろいろには、まさに宮廷物語、軍記物語、寺社縁起をひとつにしてゆく形態が見られること、したがって本論文の第一章から第四章までに考えられた多くのことがらは、すべてこの『とはずがたり』に収束する構成をとっている、と論じられる。

以上のような雄大な規模とあますところない問題系、そして駆使される膨大な参考文献群によって、本論文はこれまでさまざまに分割された領域で研究されてきた問題に対して、個別に答えながら、その中心には既成の学問的方法論を深く再考しようと目論んでいることが受け取れる、と評価された。物語、絵画、彫刻、歴史叙述などの個別研究が大きくすすむ今日であることはいままでもないが、女性学やセクシュアリティ理論、婚姻史といった新しい視野からそれらが読み直されるとき、日本古代や中世がそれらの無尽蔵といてよい宝庫であることに、あらためて気づかされる。

論の運びにおいて前をきちんと踏まえてあとを論じすすめるべきところがややもすれば先を急いでいるきらいはないか、像的記憶といったような語の装置について突き詰めた検討の余地はないか、西欧理論との今日的な対応はさらに十全を期することができるのではないか、仏教儀式などのテキストとの関係をさらにさぐる必要があるなどの、問題点や今後の課題が指摘された。それらの指摘された事柄は、これからの研鑽によって十分に補われてゆくことが見込まれることであり、ほぼ破綻なく書ききった力量を高く評価してよい。よって本審査委員会は博士（学術）の学位を授与することができると認定した。